

クナイプ療法の成立と社会的意味

～ドイツにおける自然療法の発展を見る～

五十嵐有美子*

地球環境問題解決の根底には、人間と自然の関係をどのようにとらえるのかという問題が存在する。すなわち「自然観」に対する問いかけが必要なのであるが、その手がかりの一つとして「自然療法」が考えられる。そこで本稿では、環境先進国ドイツにおいて広く普及している「クナイプ療法」を取り上げ、考察を行った。

クナイプ療法は、カトリック司祭セバスチャン・クナイプが100年以上前に提唱した自然療法で、現代に至るまで継承されている。本稿では、クナイプ療法の成立と発展過程をたどり、この療法が今日まで発展を遂げた要因について検討をくわえた。その結果、三つの発展要因として、社会的風潮、現代的要素とともにこの療法のもつ「自然観」があげられた。このことから、クナイプ療法に見られる「自然観」が人間と自然の関係のあり方について現代社会に示唆することを述べ、その社会的意味について考察を試みた。

はじめに

21世紀の人类的課題である地球環境問題解決の根底には、人間と自然の関係をどのようにとらえるのかという自然観の問題がある。この自然観は、背景となっている歴史・文化・宗教などの違いによって、さまざまなものが存在している。地球環境問題解決のためには、こうした自然観に、どのようなものがあるのかを問いかけることが重要である。

自然観を考察する一つの手がかりとしては、多様な文化のなかにある「自然療法」の存在があげられる。自然療法とは、近代医学

と対抗や調和をしながら独自の考え方をもちて発展した療法であり、日本においては、それに準ずるものとして「湯治」¹⁾などの習慣を思い起こすことができる。しかしヨーロッパでは、日本以上に自然療法は一般に活用され普及しているのである²⁾。

環境先進国ドイツにおいても19世紀以降に、自然療法が興亡する一時代があった。本稿ではドイツにおける自然療法に着目し、なかでも広く普及している「クナイプ療法」に関して、その成立から発展までのプロセスを紹介する。そして、それらをふまえて、クナイプ療法に見ることが出来る「自然観」について考察を試みたい。

「クナイプ療法」とは、カトリック司祭であったセバスチャン・クナイプ (Kneipp, S.

*いがらしゆみこ (京都府立大学大学院福祉社会学研究科博士後期課程在学中)

1821~1897、写真1) によって100年以上前に提唱された自然療法である。この療法は現代に至るまで継承されており、クナイプの伝記が教科書に掲載されているほどドイツ人にとっては著名で身近な療法の一つである³⁾。その方法は、水療法・植物療法・食事療法・運動療法・秩序療法の5つの方法から成り立ち、これらを実施できるのはクナイプ医師とクナイプ療法士に限られている。また、クナイプ療法を行う保養地はドイツ公認保養地の一種に定められ健康保険の適用を受け⁴⁾、療法発祥地のバート・ヴェーリスホーフエン⁵⁾ではクナイプ療法がまちの主要産業にまで成長している。こうした専門性や制度の確立は、他の自然療法と異なるクナイプ療法の特徴である。



S. Kneipp

写真1 セバスチャン・クナイプの肖像およびサイン
出所：Stamm-Kneippverein e.V. Bad Wörishofen,
KNEIPP = *Gesundheit aus erster Hand*, Presse-
Druck Augsburg, 1983, p.2.

日本では、クナイプ療法に関して、吉永徹夫の医学的見地からの研究⁶⁾や上原巖の林学を基礎とした保養研究⁷⁾などの検討がなされている。しかし、人間と自然の関係をどのようにとらえるのかという自然観に視点をおいた研究は、まだ行われていない。本稿の目的は、こうした視点からクナイプ療法の意義を精査することにある。

次章以降ではクナイプの軌跡をたどりながら、彼の療法がどのようにして起こり発展を遂げたのか、そしてその要因には何があったのかについて検討し、さらにクナイプ療法のもつ「自然観」を見ていくことにしよう。

1. クナイプ療法の成立と発展

以下ではセバスチャン・クナイプの生涯とその療法の成立・発展について、彼が療法を成立させたバート・ヴェーリスホーフエンに赴任する前後で時期区分し、その足跡を追ってみよう(表1)。そのあと、彼が亡くなってから現代に至るまでの、クナイプ療法の動向にも簡単にふれる。

(1) バート・ヴェーリスホーフエンに赴任するまでの前半生

クナイプは、南ドイツのバイエルン地方にあるシュテファンスリートという農村に、織物職人の息子として生まれた。生活は貧しく、11歳の頃には父とともに機織りなどをして働いていた。21歳の誕生日には彼の生家を含む火事があり、生家は全焼し、貯金も全て失われてしまう。不遇の身のなか23歳でようやくディリンゲンにあるギムナジウムに入学するが、病弱であった彼は苦学を経たその結果、当時不治の病であった肺結核を患うこととな

表1 セバスチャン・クナイプの生涯 (略年表)

1821年 5月17日	0歳。バイエルン州シュテファンズリートに生まれる (23時30分)。
1842年 5月17日	21歳。誕生日に生家全焼、貯金も焼失。
1844年12月13日	23歳。ディリンゲンにあるギムナジウムに入学。
1845年	24歳。苦学の末、不治の病 (肺結核) を患う。
1848年	27歳。ミュンヘン大学神学部へ進学。肺結核悪化、医師に見放される。ハーン (Hahn,J.S.) の『驚異なる水の治癒力』と出会い、自らに水療法の実践を試みる。
1852年 8月	31歳。カトリック司祭に任命される。
1854年11月24日	33歳。セント・ゲオルク市の助任司祭を務める。
1855年 5月2日	34歳。バート・ヴェーリスホーフエンへ赴任する。
1881年 5月3日	60歳。ドミニコ修道院の聴罪司祭にくわえて、バート・ヴェーリスホーフエンの主任司祭になる。
1886年10月	65歳。初の著書『私の水療法 (Meine Wasserkur)』を出版。
1889年	68歳。第二の著書『いかに生きるべきか (So sollt ihr leben)』を出版。
1891年 5月	70歳。クナイプ財団 (Kneippstiftung) と保養施設セバスチアニューム (Sebastianium) を設立。
1893年	72歳。オーストリア・ハンガリー帝国のヨーゼフ大公に治療。 ローマ法王レオ8世から「ムッシュー」の称号を与えられる。 小児療養所 (Kinderheilstätte) とクナイプ財団 (第二) を設立。
1894年 2月2日	73歳。ローマ旅行の際、ローマ法王レオ8世の前で基調講演を行う。 法王に水療法も施す。 25人の医師たちとともに国際クナイプ医師会 (Internationale Verein Kneippischer Ärzte) を設立。
1896年 6月23日	75歳。保養施設クナイピアヌム (Kneippianum) とクナイプ財団 (第三) を設立。
1897年 6月17日	76歳。ドミニコ修道院において死去。

(参考: Stamm-Kneippverein e.V. Bad Wörishofen, *KNEIPP=Gesundheit aus erster Hand*, Presse-Druck Augsburg, 1983, pp.9-11、吉永徹夫『クナイプ療法』村松企画、1988年、30~31頁。)
(筆者作成)

る。1845年、クナイプが24歳の頃のことであった。

彼は病を抱えたまま1848年にはミュンヘン大学神学部への進学を果たすものの、それまでの貧しい生活と勉学の両立という重荷から肺結核を悪化させ、ついに医師にも見放されてしまう。

そのような最中に、クナイプは王立図書館で偶然一冊の本を手にする。それは、1737年にシレジアの医師で「18世紀の水博士」と言われたヨハン・ジークムント・ハーン (Hahn,J.S.) によって著された、『驚異なる水の治癒力 (Unterricht von Krafft und Wirkung des frischen Wassers in die Leiber der Menschen insbesondere der Kranken)』であった。これはヨーロッパにおいて、古代から民間療法として伝わる水を用いた治療に関する書物であり、そのなかに

はクナイプのような症状についても書かれていた。そこでクナイプは、その書物を元に研究を重ね、近郊のドナウ川において自ら冷水浴を試みるようになった。初期の頃は短い時間の冷水浴であったが次第に時間を長くしていき、皮膚を通して体の全機能を鍛え、やがて彼の肺結核は快方へむかい不治の病から生還するのであった⁹⁾。この体験がクナイプ療法成立の礎となるのである。

その後大学を卒業したクナイプは、1852年にアウグスブルクのドーム寺院で司祭叙階式を経てカトリック司祭に任命され、1854年にはセント・ゲオルク市の助任司祭を務めることとなる。当時のアウグスブルクの地域周辺は他の地域と同様に、カトリック教会のいわゆる「世俗化」の余波で、修道女たちの生活は援助者もなく困窮していた⁹⁾。このことが、クナイプをバート・ヴェーリスホーフエンへ

の赴任に導くことになる。

(2) バート・ヴェーリスホーフェンで過ごした後半生

1855年、クナイプはバート・ヴェーリスホーフェンへ赴任する。それは、修道院の困窮に悩む修道女たちが、自分たちの精神的支えとなりかつ修道院の再建の手助けをしてくれる者が必要であることを、アウグスブルクのペーター・フォン・リシャルツ司祭に訴えたことによるものであった¹⁰⁾。

赴任後クナイプは、そのリシャルツ司祭の委任により、寄宿舎付きの女学校を設立するなど修道院再建に活気を与える。そしてアウグスブルク修道院の支部修道院であるドミニコ修道院の聴罪司祭となり、ざんげの聞き手として人々の心を癒す職務を全うしていく。その一方でクナイプは、自身が重い病を克服した経験から人々のもつ体の問題に関しても精力を注いでいくこととなる。それは、実際に水療法を行う場合もあれば、水の効能について話しをしてまわる場合もあった。

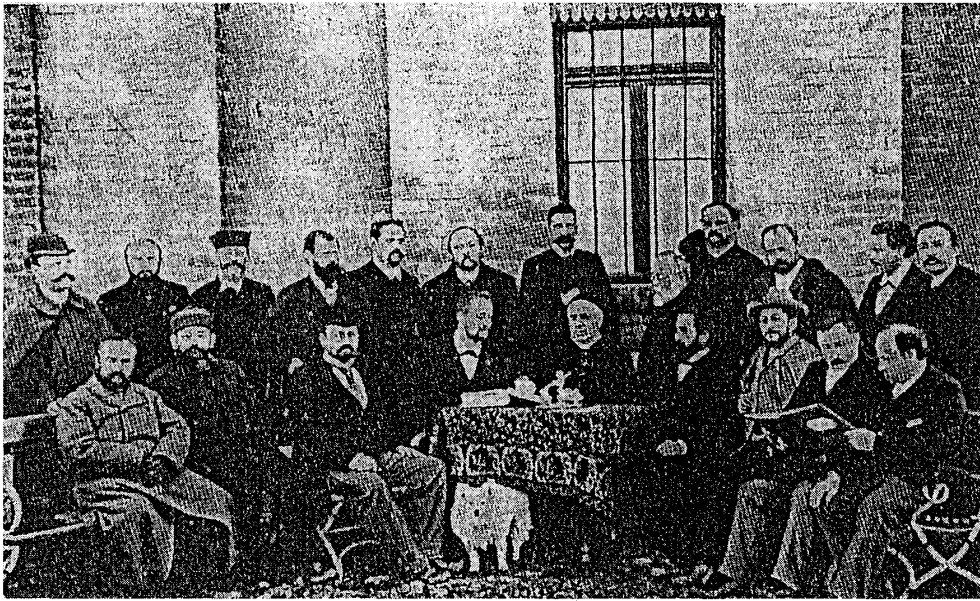
1881年には、クナイプはドミニコ修道院の聴罪司祭に代わりバート・ヴェーリスホーフェンの主任司祭となり、司祭としての勤務のかたわら修道院内の洗濯場で治療を行うようになる。クナイプの療法とその効果は人々により広められ、彼のもとを訪れる者が次第に増加し、やがて司祭としての職務時間に支障が出るまでの来訪者(患者)数となった。そのため、彼は来訪者(患者)数の減少を図り、クナイプの療法に関してまとめた著書を執筆・発行することとなる。その著書が、1886年の『私の水療法 (Meine Wasserkur)』と1889年の『いかに生きるべきか (So sollt ihr leben)』である。これらはいずれも大変な売れ行きとなり、当初の目論見は外れてま

すます多くの人々が訪れる結果となった。その後、これらの著書は英語やフランス語など多くの言語に翻訳され、クナイプとその療法はヨーロッパ中に知れわたるようになるのである。

クナイプの療法の影響で保養客が押しかけるようになったバート・ヴェーリスホーフェンでは、1888年に公的保養浴場をドミニコ修道院付近に設立した。1891年には、保養目的で当地を訪れる人々の数は、年間1000人を越えるようになった。それを受けて、小さな農村に過ぎなかったバート・ヴェーリスホーフェンは、同年の村(当時)の参事会で保養地経営を村の中心産業にするという決定を行っている。さらにこの年には、クナイプは先述の著書の売り上げと保養客からの収益を元に、クナイプ財団 (Kneippstiftung) と保養施設セバスチアニューム (Sebastianium) を設立している。

1893年には、オーストリア・ハンガリー帝国のヨーゼフ大公が座骨神経痛治療のためバート・ヴェーリスホーフェンに滞在し、クナイプのもとを訪れ治療を受けるという出来事が起こった。この治療のあと、大公がローマ法王レオ8世に進言し、クナイプは法王から「ムッシュー」の称号を与えられる。またこの年、小児療養所 (Kinderheilstätte) とさらに第二のクナイプ財団が設立される。

翌94年にはクナイプ自身がローマへ赴き、ローマ法王レオ8世の前で基調講演を行っている。またクナイプは法王の要請により、法王に水療法を施した。くわえてこの年には、クナイプの療法が現代にまで引き継がれることになる土台づくりが行われる。それは、国内外の25人の医師たちがクナイプのもとに集まり、国際クナイプ医師会 (Internationale Verein Kneippischer Ärzte) を結成したこと



※25人の医師たちとセバスチャン・クナイプ（クナイプは一列目中央）。

写真2 国際クナイプ医師会の結成（1894年2月2日）

出所：Kneipp, S., *Aus meinem Leben*, Stamm-Kneippverein e.V. Bad Wörishofen, 1897, p.36.

である（写真2）。これにより、クナイプがそれまで培ってきた療法が医学的に検証を受け、医学に導入されていくことになった。

さらに1896年には、クナイプは保養施設クナイピアヌム（Kneippianum）ならびに第三のクナイプ財団を設立し、クナイプの療法を受けることができる設備と条件を強化していく。

そして1897年、人々の体と心の健康を願ったクナイプの生涯は、ドミニコ修道院において幕を閉じた。しかし彼の死後も、彼が生前に築き広めた療法は、その根本的思想を変えることなく継承・発展し現代に至るのである¹¹⁾。

（3）クナイプ療法の発展—クナイプ没後の動向

クナイプの没後、バート・ヴェーリスホーフエンに多少の変転があったとされるが、医師など彼の後継者が、その変化によく対応し克服したとされる¹²⁾。クナイプが亡くなった

あとのクナイプ療法の広がりとしては、その発祥地となったバート・ヴェーリスホーフエンからドイツ全土、さらにはドイツ国外へと普及を見せた。以下では、クナイプ没後の療法に関連する経緯について、簡単にたどってみる。

クナイプが亡くなった1897年、その死からわずか2ヶ月後バート・ヴェーリスホーフエンにクナイプ連盟（Kneipp-Bund）が発足する。これはドイツにおいて、クナイプ療法を広めることを目的とする最大の組織であり、特定の宗教と結びつかない公益団体である。また、このあと登場するクナイプ療法を学ぶ機関（クナイプ・シューレとクナイプ・アカデミー）を組織化している。

さらに1903年には14ヘクタールの保養公園（Kurpark）が完成したものの、1914年に第一次世界大戦が勃発したため、バート・ヴェーリスホーフエンは傷病兵のための野戦病院の機能を負うことになった。しかし大戦後には保養地として回復し、1920年には村から町

に昇格するとともに、バイエルン州から保養地の称号である「クアオルト (Kurort)」を与えられた¹³⁾。

第二次世界大戦から現在までの大きな動向としては、1949年バート・ヴェーリスホーフェンが町から現在の市に昇格し、さらにドイツ水浴療法組合から「クナイプ治療浴場 (Kneipp Hailbad)」第1号地に選ばれたことがあげられる。そして58年にはクナイプ療法士を養成するクナイプ・シューレ (Sebastian-Kneipp-Schule:SKS)¹⁴⁾が、77年にはクナイプ医師を研修するクナイプ・アカデミー (Sebastian-Kneipp-Akademie für Gesundheitsbildung:SKA)¹⁵⁾が設立される。クナイプ療法は、療法従事者の専門性を高めるための養成制度を整えていった。

その後バート・ヴェーリスホーフェンに訪れる人々の数はますます増加し、2002年には保養公園がおよそ25万平方メートル広げられた¹⁶⁾。

以上から、クナイプ療法は現在に至るまでバート・ヴェーリスホーフェンの経済を支える産業として確実に発展している。また療法の医学的側面に関して、今もなお研究が続け

られている。次章からは、クナイプ療法の具体的な方法に関して概要を紹介しよう。

2. クナイプ療法の概要

クナイプ療法は、人間が本来もつ自然治癒力を高めることを目的とした代替医療¹⁷⁾の一つであり、疾病予防・リハビリテーションへの効果をもつ。そして、一つ一つの病気からくる症状を和らげるだけの治療ではなく、体全体を健康な状態に戻すことを根底においている。

クナイプとそののちに彼の考えを継承した人々により、現代までに総合的な医療システムが確立され、その基本的な方法には先述した5つの柱がある。実際には、症状などに応じてこれら5つの方法を組み合わせて行うのである。

次節以降では、現在ドイツにおいて実践されているクナイプ療法について、5つの柱それぞれに関して概説する。また、5つの療法に関する相関関係を図1に示す。

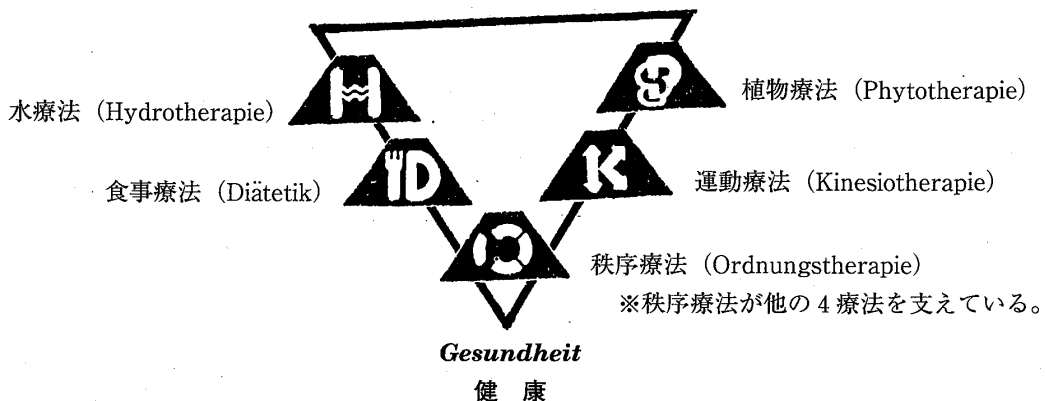


図1 クナイプ療法における5つの柱の相関図
 出所：Stamm-Kneippverein e.V. Bad Wörishofen, *KNEIPP=Gesundheit aus erster Hand*,
 Presse-Druck Augsburg, 1983, p.17.
 注：図そのものの他は、筆者による説明や見出しである。

(1) 水療法 (Hydrotherapie)

水療法は、クナイプ自身の病の克服をもたらした療法であり、かつ今日のクナイプ療法として体系的に発展させる端緒となった療法である。クナイプの著書においては、「Wasserkur」と表現されている。冷水のみ、温水のみ、冷温交互、蒸気などの状態の水を利用する。方法は清拭・注水・湿布・局部浴・全身浴などを行うが、その数は実に100種類を越えると言われる。この方法により、血液循環を活性化し心臓の働きを良くすることで、体内の毒素に対する抵抗力を上げ自律神経の調整と心の安定を促すのである。具体的には、心臓の痛みや血液循環障害、冷え、不眠、頭痛、疲労、関節の痛みなどに有効とされる。

(2) 植物療法 (Phytotherapie)

水療法と並んで、クナイプが研究にいそしんだ薬草（ハーブ）を用いた療法である。その目的は、効きの穏やかな副作用もほとんどない薬草を使用することで、近代医学によって開発された効きも副作用も強い化学薬品の使用を極力減らすことである。

植物のもつ薬効を利用することにより、心身機能全般に関わってその調整・促進・緩和などに効果がある。すなわち風邪の諸症状、沈静と睡眠促進、消化と新陳代謝の調整、循環機能調整（ただし失調以前の場合）、炎症や皮膚疾患、泌尿器系疾患などについて有効である。実践方法としては、お茶として飲用したり食事に混ぜたり、また湯船に入れて薬湯にするなどがある。

(3) 食事療法

(DiätetikまたはErnährungstherapie)¹⁸⁾

食事療法は、人間の体の基本的な機能を正

しく維持・改善する療法である。軽くてかつ必要な栄養素（ビタミン・ミネラル・繊維質・酵素・脂肪酸など）をバランスよく摂取できる質の高い食事が「よい食事」とされる。具体的には、肉類・アルコール・糖分・コレステロールなどの摂取を控え、くわえて人工添加物や農薬など有害とされる物質が極力使用されていないものを摂取するというものである。そして、その「よい食事」を毎日決まった時間に3回摂ることが基本となる。効果としては、適正体重への改善・維持、腸の活性化および排便機能の調節、新陳代謝機能障害の正常化や免疫機能の安定化があげられる。

(4) 運動療法 (Kinesiotherapieまたは Bewegungstherapie)

運動療法は（1）の水療法とほぼ一对の療法であり、併用することで水療法の効果をさらに高めるものである。運動内容や量は、担当医が患者の健康状態を診断した上で詳細に処方し、実施時には指導員の指示に従って行う。具体的には、まちの森林内や郊外の自然環境に設定されている散策路において、体操・歩行・ジョギング・サイクリングなど持久性のある軽い運動を実施する。そして、その適度な運動が体の循環機能を高め、また神経組織を調和させることで、体力強化と合わせて心もリラックスさせる効果がある。したがって、肥満や便秘、高血圧、血液循環障害などの他にも、不眠、ノイローゼ、自律神経系の失調、神経症などにも効果が見られる。

(5) 秩序療法 (Ordnungstherapie)

人間の生体リズムに合った生活習慣を維持することで、自然治癒力を高め、健康な体をつくり出すという考え方にもとづく療法であ

る。仕事など日常の暮らしのなかでのストレス刺激などから失調してしまった自律神経系のバランスを取り戻すことを目的とし、心と体の親密な関係を認め、それに関わるバランス（仕事と休息、緊張とリラクセスのバランスなど）をとることに重きを置いている¹⁹⁾。

実践方法としては、体操・自律訓練法などがあるほか、ヨガ（呼吸法）も用いられている²⁰⁾。具体的な疾病としては不眠症などへの有効性があげられる。

3. クナイプ療法の発展要因と「自然観」

これまでで明らかになったように、クナイプ療法はセバスチャン・クナイプによる偶発の発見に端を発し現在に至るまで発展・継承されている自然療法である。100年以上にわたる歴史のなかで、発祥地バート・ヴェーリスホーフではまちの主要産業になるまでに成長を遂げている。では、そうした発展・継承を遂げた要因には一体どのようなものがあるのだろうか。以下で、クナイプ療法のもつ特徴をふまえて、三つの要因に着目し考察する。

(1) クナイプ療法の特徴と発展要因

クナイプ療法が発展した要因として一つ目にあげられるのは、クナイプの生きた時代と社会の影響である。すなわち、19世紀後半とくに1870年代以降ドイツでは急速な工業化・都市化が進み、伝統的な農村地帯から都市部へと人口が大量に流出し、生活環境の悪化などあらゆる社会問題が引き起こされた²¹⁾。その激変する社会状況への反動として、医師・教育者などさまざまな担い手によるさまざま

な自然療法がドイツ各地で勃興したのである。そのような観点からすると、クナイプによる自然療法もまた、「自然療法の時代」におけるムーブメントの一つに数えることができるのである。そしておそらくクナイプとその他の自然療法は、相互に影響を与え合ったのであろう。

「自然療法の時代」のその後を見ると、概して自然療法は派閥化し対立が生まれ、その結果衰退の途をたどることになる²²⁾。だが、多くの自然療法がその活力を失っていったなかで、クナイプの自然療法は21世紀の現代まで発展継続していることに注目しなければならない。クナイプ療法の発展要因には、急速な工業化という時代の潮流への反動の他にも諸要因があるということである。その要因に、現代的要素を考えることができるのではないだろうか。

現代的要素とは、統合医療の先駆けとしての評価である。統合医療とは、通常医療（西洋医学）と代替医療を合わせて患者に用いる医療のことであるが、それは世界的に近年になって「21世紀の医療」として注目されるようになってきた²³⁾。クナイプ療法の発展経緯をたどると、はじめは民間療法にヒントを得た自然療法であったものが、次第に体系が整えられ代替医療として揺るがない地位を占めるようになる。そしてその後西洋医学との融合が目指され、科学的研究と実践が積み重ねられて西洋医学と融合していく。くわえて、その融合された医療を行う専門家としてクナイプ療法士とクナイプ医師を養成するまでに整えられた今日のクナイプ療法を見ると、まさに統合医療そのものと言うことができる。したがってクナイプ療法は、統合医療の先駆けという現代的な意味をもつ療法であり、これがクナイプ療法の発展と継承に関する二つ

目の要因と言えよう。

最後の三つ目の要因は、クナイブ療法に見ることができる「自然観」の存在である。古来の民間療法にヒントを得たクナイブの自然療法は、その意味ではオリジナルで目新しいものではない²⁴⁾。しかしそのことが逆に、クナイブにとって、またクナイブから療法を教えられた人々にとって、古くから伝わる自然観をふまえた馴染みのある素朴な方法となり、受け入れやすさを生んだのではないだろうか。また全くのオリジナルな方法ではなかったとはいえ、古来の民間療法をもとに5つの療法を総合的に利用するというクナイブ療法の特徴は画期的なものとして評価できるものである。

ではクナイブ療法にある「自然観」とは、具体的にはどのようなものであろうか。節を変えて検討をくわえよう。

(2) クナイブ療法に見られる「自然観」

「自然観」とは、「自然をどのようなものとしてとらえるかという見方」と定義される²⁵⁾。それでは、クナイブは自然をどのようなものとしてとらえていたのであろうか。

クナイブ療法の端緒となった水療法のルーツをたどると、古代ローマ人に行き当たる。古代ローマ人は水の効用として洗う・飲む以外に、ストレスの解消など医学的効用を見出し、その目的で香油などと合わせて水を利用していたとされる²⁶⁾。さらにクナイブ療法における病気の原因に対する考え方は、古代ギリシアの代表的な医師ヒポクラテス(B.C.460~B.C.377年)の四体液説と共通する部分がある²⁷⁾。つまり、人間は体液に変調をきたすことによって病気を引き起こすと考えるものである²⁸⁾。またヒポクラテスとは、食事と健康の関係を重要視している点²⁹⁾や

経験主義にもとづく医療を行う点、人間の自然治癒力を高めることを医療の目的としている点なども共通している。以上のことから、クナイブは古代ローマや古代ギリシアからの民間療法を再発見・応用したことで、古来の自然観を踏襲したと言えるのではないだろうか。

しかし一方で、クナイブは自身の司祭としての経験も影響してか、人間あるいは人間と自然の関係について、宗教的要素も含めた記述を行っている。

「肉体はまさに魂の宿る小屋である、そしてその両者はお互いに左右し合うのである。すなわち単に手足の何か欠けているだけではなく、そのような時はすでに肉体全体が病んでいるのであり、そして精神もまた病むのである…」³⁰⁾

「自然と関わりをもつ生活は、永続的な自然力を高めるトレーニングにより肉体と精神を健康にする、または健康を維持することを人に教える。そしてそのことを越えて、創造主の存在を気づかせる。」³¹⁾

これらは、キリスト教の影響を受けた人間や自然に関するクナイブの考えを顕わすものである。

さらに近代西洋医学に対して、クナイブは次のように述べている。

「ふつう私は人々を医師のもとへ行かせる、それゆえ私にはたいてい次のようなことが残される、つまり医師によって何の助けも得られなかった人々あるいは貧しい人々である。彼ら(医師に見放された人々や貧しい人々；筆者による加筆)は、医師を利用することができなかったからである。私は誠実に次のこ

とが言える。すなわち、私はできる限り近代西洋医学の薬を遠ざけてきた。しかし私は、病んでいる人々にその薬から逃れさせることはできなかった。私は魂の指導 (Seelsorge) をする限りにおいて、辛くも病んでいる人々を導くことができた。」³²⁾

「私の比類のない努力はいつでも、(近代西洋医学の；筆者による加筆) 薬をなくしたいという思いのためであった、しかし私はそのことをよく知っているということであって、それは私の専門ではなかった。」³³⁾

「水は一つの治療法である。それはあらゆる患者に利用できるものである、それゆえ水はまた病気を完全に治す一つの薬である。そして水を用いて病気を余すところ無くさらに安全に除去することができる。(略) 医師が本物の水療法をするようになればいいのに。そうなれば、全ての有毒な薬はわきへおいやられるだろう。ゆえに私の努力はただ、以下のことを可能にするためである。すなわち、水療法を完全に行う医師が存在することである。それは水の効果について根本的に知る医師の存在であり、水の効果を知ることによって患者の症状は適切に和らぎ次第に完全に治ることがわかる医師の存在である。」³⁴⁾

これらから、クナイプが近代西洋医学の全てを否定しているわけではないことがわかる。

クナイプが否定的にとらえているものは、近代西洋医学における医術そのものではなく薬の使用であると言えよう。それは彼が、薬の副作用を深刻な問題として考えたからであろう。そのような副作用のある薬を使用せず、人間のもつ自然治癒力を高めて疾病を完治する、あるいは予防することの必要性を説いた

のである。つまり、彼は副作用がないと思われる方法を用いて、あらゆる人々に医師が医術を施すことを望んだのである³⁵⁾。そのため、副作用がないと思われる自然のもの(水・薬草など)を利用することを前提に、国際クナイプ医師会などでクナイプ療法の医学的検証が進められた。

こうした彼の人間と自然の関係に対する考え方はまた、前節で取り上げた発展要因の一つである統合医療の先駆けの一因となった。

おわりに

著名な自然療法の一つであるクナイプ療法について、その成立や発展過程を見てきた。そこから、クナイプ療法のもつ人間と自然の関係のとらえ方には、三つの自然観が存在していることがわかった。その三つの自然観とは、自然と人間を区別しない古来の自然観、宗教のなかにある自然観、そして自然と人間を区別する自然科学のなかにある自然観である。その三つのなかでも、クナイプ療法において、より強調される自然観とは何なのであろうか。

クナイプはその著書の一つである『So sollt ihr leben』のなかで、まず川の水とそこに棲む魚の関係に着目する。清浄な川の水ではマスは元気がよく生き生きと生息するのに対し、汚染された川の水では同じマスでも元気がなく生息数も少ないことを例示する。そして、人間を含めたあらゆる動物における生命維持の絶対条件として、呼吸を取り上げる。さらに酸素など水を構成する目に見えない物質と呼吸の関係を考察し、生物生命の健康的な維持と清浄な空気の見出すのである。次に彼は、そのことを人間に置き換え、

清浄な空気（農村地帯）に住む人間と汚染された空気（都市部）に住む人間の健康について、以下のように述べる。

「それゆえ、また都会人は、清浄で健康に良い空気を吸うことができる田舎に行くことを好むのである。そうすることによって、より良い血液と体液がつくられるのである。」³⁶⁾

クナイプが人間の健康と空気の見逃さなかったのは、彼自身のもつ肺結核の罹患という経験からであろう。くわえて、そのような人間の健康と空気の見逃さなかったのは、川に棲むマスなど他の生物に同様にあてはめた視点は、クナイプ療法の成立や発展過程に少なからず影響を与えたのではないだろうか。

この視点について、クナイプ療法を構成する三つの自然観のなかで分類するならば、これは自然と人間を区別しない古来の自然観である。つまり、他の生物が健全な状態で生きていくことができる環境であれば、人間も同様に健康な状態で生きていくことができる環境であるということであり、逆に他の生物が不健全な状態で生きていく環境であればまた人間にとっても不健康な状態で生きていく環境であるという、人間とその他の生物の対自然における同一視的立場である。こうした人間とその他の生物の自然に対する優劣のない立場は、急速な工業化・都市化というクナイプの生きた社会状況に立ち返ると、クナイプ療法のもつ思想的特徴と言える。

総じて、クナイプ療法の思想的特徴である自然と人間を区別しない古来の自然観が、クナイプ療法のもつ三つの自然観のなかでも基調を成すものと考えられよう。

また、クナイプ療法のもつ三つの自然観そ

れぞれの系譜が、ドイツにおいてどのような展開をしているのだろうか、あるいは異なる文化のなかでどのような特徴をもって存在しているのだろうか。そこで提示される人間と自然の関係のあり方は、地球環境問題の解決やそのための環境教育に関わる環境思想などの本質につながっていくものだと考えている。これらが今後の検討課題として残される。

したがって、クナイプ療法は人間が自然とどのように関わりをもち、いかにして生きるべきかを示した一モデルであり、そのことがクナイプ療法の果たした社会的な意味であろう。

<注>

- 1) クナイプ療法との大きな差異として、湯治は農閑期や漁獲期前に滋養と休養をするものであり、療法というには医学的な知見にもとづく部分があまりに少ない。近年になりようやくウェルネス・ツーリズムの観点から、医学的根拠にもとづいた温泉地滞在プログラムの研究や試行が始まっている。植田理彦「『湯治』の見直し」、日本交通公社『観光文化』第168号、2004年、1頁。
- 2) ドイツでは、4年に1回の頻度で3週間の保養を行うことが法的に認められている（2000年現在）。「保養」に自宅療養は認められないため、ドイツ全土に散らばる各保養地に出かけることになる。
ドイツの公認保養地は4種類で、①温泉・鉱泉②泥浴③気候④クナイプ、がある。上原巖『森林療法序説—森の癒しことはじめ』全国林業改良普及協会、2003年、27～28頁。
- 3) ノイマイヤー、ユルゲン「ストレス社会を背景に需要高まるクナイプランド」、国際商業出版株

- 式会社編『国際商業』457、2006年、60～62頁。
- 4) クナイプ療法を行う保養地は、ドイツ全土で現在70か所である。Verband Deutscher Kneippheilbäder und Kneippkurorte, *Kneippheilbäder und Kneippkurorte in Deutschland, zur Karte*, <http://www.kneippverband.com>.
 - 5) 現在は市で、人口は1万5000人程度。それに対し、毎年のべ100万人程度が保養のためにバート・ヴェーリスホーフエンに滞在する。前掲2)、21頁。
また「バート (Bad)」とは、水 (冷水・温水) を利用した保養地であると州から認められ「クアオルト (Kurort)」の称号を受けた地域のみが冠することができるものである。したがって、バート・ヴェーリスホーフエンも正確には1920年まで「バート」は地名につかないが、本稿では便宜的に一貫してバート・ヴェーリスホーフエンと呼称する。上原巖「ドイツ・バート・ヴェーリスホーフエン市における保養地形成過程」、日本造園学会『ランドスケープ研究』64 (5)、2001年、493～496頁。
 - 6) クナイプ療法を初めて日本に紹介したと思われる。吉永徹夫『クナイプ療法』村松企画、1988年。
 - 7) 前掲2)、その他にも、上原巖「自然散策が医療・保養に取り込まれているドイツのクナイプ療法」、日本林学会『森林科学』19、1997年、84～87頁など。
 - 8) 前掲6)、21～22頁、29～31頁。この他クナイプとクナイプ療法について、本稿全般にわたり次の3冊を参考にしている。今井良久『今あかす「クナイプ自然療法」の秘密』東京経済、1992年。今井良久『クナイプ自然療法 上』東京経済、1993年。今井良久『クナイプ自然療法 下』東京経済、1994年。
 - 9) この「世俗化」とは教会財産国有化のことであり、その影響によって修道院は宗教活動をやめなければならない状態に陥った。1802年に、バイエルン州内務大臣モントグラス伯により定められた。ごく一部の修道女による抵抗があったものの、1842年のルートヴィヒ1世の時代となるまで、修道院活動の再開が許可されることはなかった。前掲8)、今井1992年、13～17頁。
 - 10) クナイプによると、修道院の再建を手助けする者として彼が選ばれた理由は、貧困に苦しめられた経験などから経済に関する知識をもっていたからである。
Kneipp, S., *Aus meinem Leben, Stamm-Kneippverein e.V. Bad Wörishofen*, 1897, pp.24-25.
 - 11) 前掲3)、同頁。
 - 12) 前掲6)、32～33頁。
 - 13) 前掲5)、上原2001年、495頁。
 - 14) 国家認定された職業専門学校であり、ここで養成されるのはクナイプ療法に携わる一種の作業療法士である。前掲8)、今井1992年、133～145頁。
 - 15) アカデミー入学の基礎条件としては、通常の医師免許を取得していることが求められる。日本人であっても医師免許があれば入学資格がある。前掲8)、今井1992年、126～132頁。
Sebastian-Kneipp-Akademie für Gesundheitsbildung: SKA, *MEHR GESUNDHEIT DURCH BILDUNG PROGRAMM 2006*, 2005, p.5.
 - 16) 1989年には、過去最多の144万人の滞在客数を記録する。Bad Wörishofen, *So entwickelte sich Bad Wörishofen, Die Historie von Bad Wörishofen*, <http://www.bad-woerishofen.de>.
 - 17) 具体的には、中国の伝統医学、インドの伝統医学 (アーユルヴェーダ)、民間療法など。また代替医療の代表的な学会である日本補完代替医療学会によると、次のように定義されている。代替医療の定義：「現代西洋医学領域において、科学的未検証および臨床未応用の医学・医療体

系の総称」。

日本補完代替医療学会、<http://www.jcam-net.jp/info/what.html>.

- 18) 食餌療法とも訳されている。前掲6)、83～95頁。
- 19) クナイプ自然療法が確立されたまちであるバート・ヴェーリスホーフエンにおいては、保養客の休息と睡眠を守るため、ならびに排気ガス対策のため、12～14時および22～翌朝6時の間トラックやオートバイの乗り入れが禁止されている。この規制は、1976年「保養環境維持条例(Kurbereich)」によるものである。前掲5)、上原2001年、495頁。
- 20) Wurm-Fenkl, I/Fischer, D, *Richtig kneippen*, FALKEN Verlag,2003,p.81.
- 21) 相馬保夫『ドイツの労働者住宅』山川出版社、2006年、66～70頁。
- 22) 山名淳『ドイツ田園教育舎研究—「田園」型寄宿制学校の秩序形成—』風間書房、2000年、132～142頁。
- 23) 白川太郎「森林浴のストレスリダクション効果」『国際社会における森林セラピーへの期待と今後』森林セラピー国際シンポジウム資料、2005年。
- 24) この点について、最近のクナイプ療法に関する研究論文において同様に指摘されている。Ganzer, K., “Die Gesundheitslehre Sebastian Kneipps und ihre soziale Bedeutung”, 2002, pp.10-13.
- 25) 佐島群巳他編『環境教育指導事典』国土社、1996年。
- 26) 前掲6)、35頁。
Ärztegesellschaft für Präventionsmedizin und klassische Naturheilverfahren Kneippärztebund e.V., *Naturheilverfahren, HYDRO-*

THERAPIE, <http://www.kneippaerztebund.de/html/hydrotherapie.html>.

- 27) ヒポクラテスは、原始的な医学のなかから迷信や呪術を分離し科学的な医学を発展させた。その業績から、「医学の父」や「医聖」と呼ばれる。彼の唱えた四体液説は、近代西洋医学が生まれる前の西洋において、主流な考え方であった。その4種類の体液とは、血液・粘液・黄胆汁・黒胆汁、あるいは血液・粘液・胆汁・水であるとしている。彼の書物により違いがあり定まてはいないが、いずれにしても人間はそれらの体液からできているとする考え方である。宮本忍『医学思想史I』勁草書房、1971年、52～88頁。
- 28) クナイプは病気の原因として、次の4点を説明する。ヒポクラテスと共通する部分は、1.と2.の考え方である。
「1. 血液と体液の悪い状態、2. 血液循環の悪さ、3. 肉体の乱用および予定より早い酷使および虚弱化、4. 魂の精神的乱用と衝撃…このことは重要なことである、なぜならこの原因が別の鎖の個々の輪と結びついて病気の前をを設定するからである。」
Kneipp, S., *So sollt ihr leben*, Franz Ehrenwirth Verlag GmbH & Co.KG, 1889, pp.12-13.
- 29) クナイプ療法の植物療法における考え方と共通する。前掲27)、70～72頁。
- 30) 前掲10)、pp.3-4.
- 31) 前掲28)、pp.15-16.
- 32) 前掲10)、p.23.
- 33) 前掲10)、pp.33-34.
- 34) 前掲10)、p.37.
- 35) 前掲8)、今井1994年、16～17頁。
- 36) 前掲28)、pp.26-27.